

平成 28 年 6 月 23 日

東松島復興推進員だより(第 27 号)

～地を往きて走らず～

JICA 地域復興推進員(宮戸担当)

秋山 千恵

東松島市の宮戸島は、古来縄文時代に人が暮らしていたと言われています。人々は様々な災害を乗り越えて今なお暮らし続けています。長い歴史の中で伝わっている教えが東日本大震災時にも役に立ち、大きな人的被害は免れることができました。今回は宮戸地区の歴史を学べる場所をご紹介します。

〈奥松島縄文村歴史資料館〉

奥松島縄文村歴史資料館(以下縄文村)では、里浜貝塚より出土した縄文土器や骨角器、石器、装身具、縄文人の食料である魚や獣の骨などを展示しています。展示の他にも、火おこし体験や勾玉づくりなどが出来、目で見るだけでなく、縄文人の生活を実際に体験することができます。



奥松島縄文村歴史資料館

縄文人の知恵と生活が学べる。



期間限定の企画展を開催中

上記のような企画展の他、様々なイベントが実施されています。5 月には宮戸市民センターと共同で「縄文・宮戸まつり」が開催されました。おまつりでは縄文体験や大高森トレッキングツアー、「宮戸島復興の記録」上映会の他、よさこいステージやバンド演奏など多くの来場者が楽しむことが出来るイベントが満載です。

〈さとはま縄文の里 史跡公園〉

縄文人の暮らしていた遺跡である「里浜貝塚」を「さとはま縄文の里史跡公園(以下史跡公園)」で見ることができます。里浜貝塚は縄文時代前期から弥生時代中期にかけてのムラの跡です。日本最大級の規模を持つ貝塚であり、縄文人の骨や漁具、装身具などが出土しています。史跡公園からの景色は縄文時代とほとんど変わっていないそうです。「縄文人が暮らした島」に来て、「縄文人が見ていた海」を是非見にいってみてはいかがでしょうか。



春には菜の花畑が一面に広がる。

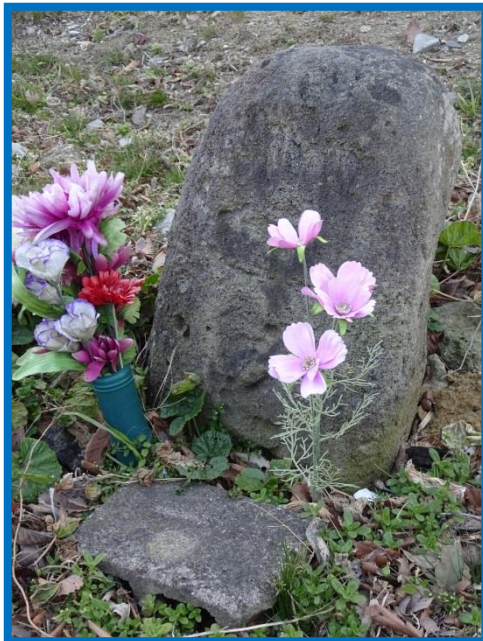


四季折々の大自然が迎えてくれる。

(写真はヤマザクラ)

〈石碑の教え〉

東日本大震災では、松島湾に浮かぶ島々が津波の衝撃を和らげたとされています。しかし、松島湾の入り口にある宮戸島は津波の影響をまともに受けました。古くより語り継がれているもののひとつとして、宮戸島には石碑があります。貞観地震(869年)の碑であるとも、そうでないとも言われていますが、ここで大浜から来た波と室浜から来た波がぶつかったと伝わっています。こういった石碑や語り継ぎなどによって、宮戸の人々には地震が来たら高台に逃げることが身についています。そのため、1000年に1度の大津波と言われている東日本大震災の際にも、石碑より高い場所にある宮戸小学校(平成28年3月閉校)へと多くの人が避難して助かりました。



津波を伝える石碑
宮戸郵便局の近くにある。



観音寺にある津波を示す石碑

地震が来たら高台に逃げる、ということは広く一般的に知られています。東日本大震災での津波を目にして、その教えは強く人々の心に刻まれたのではないのでしょうか。東松島市では、震災前より形成されていた「市民協働のまちづくり」が避難所運営、迅速な復興計画の策定に繋がりました。そして、宮戸地区では人と人との関わりの深い地域コミュニティがあったからこそ、多くの命が助かりました。そのような歴史と教訓を地域復興推進員として今後も世界へと発信し続けたいと思います。

【推進員だよりバックナンバー：JICA 東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICA は、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団(NPO)等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で取り組んでいます。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋がります。
